

新春の夢……地域でも、 少しずつ、少しずつ……



空知南部医師会
にしみこどもクリニック

にし み とし ひろ
西 見 寿 博

10月に「巳年生まれの会員様 各位」という原稿依頼のお手紙を受け取り、来年は年男に当たるのかとハッと気付きました。これを機会に今までの日々を振り返ってみました。

私は九州福岡県の南部に位置する久留米市から東へ30kmほど大分県側に行ったところにある浮羽郡（現うきは市）吉井町で1953年12月3日に生まれました。父は2代目の内科開業医でしたので、生活は比較的安定していました。小学校卒業後は、久留米市にある学芸大学（現在は教育大学）附属中学から久留米大学附設高校に進みました。高校3年間はほとんどサッカーに明け暮れ将来像など掴めるものもなく2年浪人生活の後に1974年北海道大学理類に入学しました。時は70年安保後の時代で、確たる学業も修めきれず人生再建の目標を中高校時代に考えたこともある医師の道へと決めました。北大中退後再度の浪人生活を送り、77年に久留米大学医学部に入学しました。83年に無事卒業後は当時の山下文雄小児科教授のお誘いをうけて小児科へ入局しました。病棟勤務後、当時はまだ馴染みの薄かった新生児医療に興味を持ち久留米市の聖マリア病院新生児科へ、その後は小児救急医療で孤軍奮闘されていた市川光太郎先生のお誘いを受け北九州市立八幡病院に勤務しました。その後、いくつかの縁があり1998年4月に夕張市立総合病院に赴任しました。北海道は高校時代からの憧れの地で、北大に短期間在学したこともあり意気揚々と夕張に入りましたが、いきなり数多くの黒く大きなカラス集団に監視されたり、冬の積雪量の多さや氷点下20℃の世界にはびっくり、クタクタの毎日でした。夕張では6年間お世話になり、その後2005年12月に栗山町で小児科医院を開設して以来、今日に至っています。

6回目の年男ですから今年で72才になります。この年齢で医院開業20年を迎えるようになると、正直これから先の人生は後何年くらいか、つつい考えてしまいます。一番避けたいと思うことは突然に人生の終焉を迎えることです、この小さな町で一人しかいない小児科医が消えてしまうと町内に多大の迷惑をおかけすることになります。新春を迎える時期にこのような話はそぐわないとは思いますが、地域医療に携わっているためか、生と死をそのようにも考えることが多くなりました。

その反面、地域で子どもたちの成長をずっと見ていくことは結構楽しいものだと最近思うように

なってきました。低体重出生でなかなか体重が増えない赤ちゃん、熱が下がらずどうしようかと迷ったり、将来ちゃんとお話できるかなと心配した幼稚園児など、さまざまな「栗山っ子」と出会って来ました。その反面、最近では私よりも大きな体格になって、「咳が出て……」、「熱が下がりません……」と診察室に入ってくる子も多くなり、学校面白い？部活は楽しいかい？など尋ねると恥ずかしそうにも話をしてくれます。サッカーの公認審判員でもあるため現在地域のサッカー協会の会長を務めています。昨年10月、栗山町や近隣に住む子どもたちで構成されている小学生チーム（U-12）「くりやまFCスポーツクラブ」が、全道大会で決勝戦まで進み、強敵の「北海道コンサドーレ札幌U-12」と対戦しました。今年のチームは上位に勝ち上がるかもしれないとチーム首脳陣から聞いてはいましたが、ここので来るとはと、期待が高まりました。結果は0-1での敗戦でしたが、田舎町のチームでよく戦ったと思っています。このような次代を担っていく若者と出会うことは嬉しく、また驚きもあります。あの時の試合はどうだった？などと話すことは楽しいひとときです。この様な触れ合いの中で子どもたちの成長を見守っていくことは小児科医に限らず、医療に携わる全ての人の「使命」ではないかと思うことが多くなりました。

新しい年を迎えるにあたり、夢と希望を持って成長する子どもたちと出会う日々の中、是非とも実現できたらと思うことがあります。

- ① 子どもたちの教育費・給食費は無料とし、意欲に溢れ世界にも眼を向ける人材を育てること。
- ② 国民の健康や栄養状態を維持・改良し、外国に頼らない食料自給達成を実現すること。
- ③ 生まれ育つ地域でも日々充実した、胸を張って生きていける地域の環境作りを進めること。

夢の様な子育て方針ですが、掲げるだけではなく、焦らずに身近なところから実現していけたらよいかなと思っています。少しずつ、少しずつです。近年「こどもまんなか こども家庭庁」が設置されましたが、将来を見据えた画期的なこども方針が実現される社会を期待したいと思っています。